

中級日本語教育実習コース(2020年9月～11月) 修了レポート

提出日:2020年11月27日(金)

氏名:武田俊一

思うところあり、長年勤めた会社を定年の少し前(かなり前!?)、56歳で辞めた。三十数年前、学生であった私は、見知らぬ国々へ行ってみたい、との漠とした単純な想いから日本語教師という職業に興味を持ち、日本語教授法や言語学を学んでいた。しかし、大学4年の時、そうした想いと(当時の)現実の狭間で出した自分なりの答えは、所謂企業への就職であった。幸い、勤め始めた会社では一貫して海外事業に携わることができた。

が、6年間のインド駐在から帰任した後、若い頃とは異なる想いから“日本語を教える”ことへの興味が再び湧き、会社を辞め大学へ戻り日本語教育を学び直した。理論・理屈は一通りアップデートできたように思ったが、その思いは最終学期の日本語教授法のクラスで打ち砕かれた。模擬授業がありビデオ撮りをしたのだが、そこに映った自分の授業風景を見て愕然とした、“まるでなっていない!”と。実践力・現場力を身に付けたい、リアルなコミュニケーションを行ないながら学習者にとり真正性のある場面設定や例文提示ができるようになりたい、と切実に思ったのである。長くなったが、これが私の TIJ 日本語教育実習コース受講動機である。

結論から言うと、TIJ の当該コースは、120%、私の想いに応えてくれるものであった。担当頂いた阿字地先生からの確かつ実践的な指導を受け、並行して多様な教室活動を拝見し、実に多くの気付きを得られたからである。

阿字地先生からは、学習者の注意を引き集中力を高められるよう、発話のトーンやスピードに変化を付けるように、といったテクニック面のアドバイスを初め、求めるような回答が出てこないとき、(難し過ぎず易し過ぎずの)良質な質問やヒントを繰り出し、学習者自身が考え、理解し、回答できるよう、教師の“質問力”を鍛えることが肝要、という難度の高い、しかしながら、とても大切なことを教えて頂いた。

授業見学では、来日間もない初級学習者から自律的学習軌道に乗り日本語ネイティブもたじろぐような質問をしてくる中・上級者までを対象に、若手やベテランの先生方がそれぞれ工夫をこらし教室活動を進めていく様子を拝見することができ、本当に勉強になった。

頂いたアドバイスは多岐に亘り、見学させて頂いた授業も、そのスタイルや雰囲気はどれ一つとして同じものは無かったが、それらには通底する“基本フレーム”があった。それは、『学習者中心』の姿勢であり、その実践である。学習者にとって身近な場面や臨場感ある状況を設定し、問い掛け、学習者自身で考えることを促し、授業に巻き込んでいく、ということである。

3回行なった実習では、その『学習者中心』を念頭に置き、実践することを心掛けた。実際の学習者相手であることから、模擬授業で頂いたアドバイスを踏まえ繰り返し練習し臨んだ。が、思い描いていた通りに事は進まなかった。学生の皆さんには申し訳ない限りであった。他方、回を重ねるごと

に、少しずつではあったが、改善の兆しや手ごたえを感じられたことはちょっぴり嬉しかった。実習を通じて得た多くの反省と気づきを今後につなげていくことを誓い、学生の皆さんには許しを請うこととしたい。

日本語に限らず、言語というものは奥深く、語彙・表現・文法等全ての側面を理解することは例えネイティブであっても容易では無いと思う。だからこそ、第二言語として日本語を学ぶ学習者と共に、自分も日本語の学びを継続し、今回 TIJ で学んだ”基本フレーム”の中に、それらを一つ一つ積み上げていきたい。今は、頭でっかちで実践力が伴っていないが、私の目標は、支援をより必要とする学習者、例えば、学習意欲が減退したり日本語の入口で躓いているような学習者に対し、彼等彼女等の興味や関心を引き付け、日本語の扉を開いてあげられる、そういう日本語教師になることだ。

コロナ禍で教室活動を従来のように行なうことが儘ならない中、多くの気づきと共に『学習者中心』とは何か、を教えて頂いた学生の皆さん、先生方に心から感謝申し上げます。（本文 1,652 字）